「ホントは怖い食事会、のこころ」

6月16日 逍遥

今日6月16日は、薩長同盟締結（1866年1月）と同じ年に、駐日英国公使パークス一行が、グラバーの仲介により、鹿児島を訪問した日です。

この両者、そのわずか3年前には、生麦事件の犯人処罰と賠償請求に絡んで、薩英戦争で戦火を交えた当事者どうしでしたが、その後は、幕府を支援していた仏国公使ロッシュと対抗するため、パークスは薩摩藩との接近を図ろうとしたのでした。薩摩藩側も、軍艦購入の必要などから、パークス一行を歓迎し、豪華な日本料理を三の膳まで用意するなど、最高の晩餐でもてなしたとされています。この接待は、翌17日も続き、磯御殿において、藩主・島津忠義や国父・久光らの出席の下、欧風の宴席が設けられたようです。（尤も、パークスらがこれらの料理をどう思ったかは色々あるようですが）

アヘン戦争後、西洋列強の外圧が強まり、「自由貿易主義」の向こう側に「帝国主義」が見え隠れする、（ホントは怖い）国際情勢の中で、薩摩藩はその後の日本の内政と外交に大きく関わっていくこととなったのでした。

次回「これからの鹿児島を見つけ続ける御楼門、のこころ」